

医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会の IF 記載要領 2018（2019 年更新版）に準拠して作成

HMG-CoA 還元酵素阻害剤
日本薬局方 アトルバスタチンカルシウム錠
アトルバスタチン錠5mg「NS」
アトルバスタチン錠10mg「NS」
Atorvastatin Tablets 5mg・10mg “NS”

剤形	フィルムコーティング錠
製剤の規制区分	処方箋医薬品（注意－医師等の処方箋により使用すること）
規格・含量	5mg 錠：1 錠中日本薬局方アトルバスタチンカルシウム水和物 5.42mg （アトルバスタチンとして 5mg） 10mg 錠：1 錠中日局アトルバスタチンカルシウム水和物 10.84mg （アトルバスタチンとして 10mg）
一般名	和名：アトルバスタチンカルシウム水和物 洋名：Atorvastatin Calcium Hydrate（JAN）
製造販売承認年月日 薬価基準収載・販売開始年月日	製造販売承認年月日：2013 年 2 月 15 日 薬価基準収載年月日：2013 年 6 月 21 日 販売開始年月日：2013 年 6 月 21 日
製造販売（輸入）・ 提携・販売会社名	発 売 元：科研製薬株式会社 製造販売元：日新製薬株式会社
医薬情報担当者の連絡先	
問 合 せ 窓 口	科研製薬株式会社 医薬品情報サービス室 フリーダイヤル：0120-519-874 受付時間：9:00～17:00（土、日、祝日、その他当社の休業日を除く） ホームページアドレス： https://www.kaken.co.jp/

本 IF は 2024 年 1 月改訂の添付文書の記載に基づき改訂した。

最新の情報は、独立行政法人 医薬品医療機器総合機構の医薬品情報検索ページで確認してください。

医薬品インタビューフォーム利用の手引きの概要 ー日本病院薬剤師会ー

1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として、医療用医薬品添付文書（以下、添付文書）がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合があり、製薬企業の医薬情報担当者（以下、MR）等への情報の追加請求や質疑により情報を補完してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための項目リストとして医薬品インタビューフォーム（以下、IF と略す）が誕生した。

1988 年に日本病院薬剤師会（以下、日病薬）学術第 2 小委員会が IF の位置付け、IF 記載様式、IF 記載要領を策定し、その後 1998 年に日病薬学術第 3 小委員会が、2008 年、2013 年に日病薬医薬情報委員会が IF 記載要領の改訂を行ってきた。

IF 記載要領 2008 以降、IF は PDF 等の電子的データとして提供することが原則となった。これにより、添付文書の主要な改訂があった場合に改訂の根拠データを追加した IF が速やかに提供されることとなった。最新版の IF は、医薬品医療機器総合機構（以下、PMDA）の医療用医薬品情報検索のページ（<http://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>）にて公開されている。日病薬では、2009 年より新医薬品の IF の情報を検討する組織として「インタビューフォーム検討会」を設置し、個々の IF が添付文書を補完する適正使用情報として適切に審査・検討している。

2019 年の添付文書記載要領の変更に合わせ、IF 記載要領 2018 が公表され、今般「医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドライン」に関連する情報整備のため、その更新版を策定した。

2. IF とは

IF は「添付文書等の情報を補完し、医師・薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製造販売又は販売に携わる企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

IF に記載する項目配列は日病薬が策定した IF 記載要領に準拠し、一部の例外を除き承認の範囲内の情報が記載される。ただし、製薬企業の機密等に関わるもの及び利用者自らが評価・判断・提供すべき事項等は IF の記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供された IF は、利用者自らが評価・判断・臨床適用するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。

IF の提供は電子データを基本とし、製薬企業での製本は必須ではない。

3. IF の利用にあたって

電子媒体の IF は、PMDA の医療用医薬品情報検索のページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従って IF を作成・提供するが、IF の原点を踏まえ、医療現場に不足している情報や IF 作成時に記載し難い情報等については製薬企業の MR 等へのインタビューにより利用者自らが内容を充実させ、IF の利用性を高める必要がある。また、随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては、IF が改訂されるまでの間は、製薬企業が提供する改訂内容を明らかにした文書等、あるいは各種の医薬品情報提供サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに、IF の使用にあたっては、最新の添付文書を PMDA の医薬品医療機器情報検索のページで確認する必要がある。

なお、適正使用や安全性の確保の点から記載されている「V.5. 臨床成績」や「XII. 参考資料」、「XIII. 備考」に関する項目等は承認を受けていない情報が含まれることがあり、その取り扱いには十分留意すべきである。

4. 利用に際しての留意点

IF を日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用していただきたい。IF は日病薬の要請を受けて、当該医薬品の製造販売又は販売に携わる企業が作成・提供する、医薬品適正使用のための学術資料であるとの位置づけだが、記載・表現には薬機法の広告規則や医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドライン、製薬協コード・オブ・プラクティス等の制約を一定程度受けざるを得ない。販売情報提供活動ガイドラインでは、未承認薬や承認外の用法等に関する情報提供について、製薬企業が医療従事者からの求めに応じて行うことは差し支えないとされており、MR 等へのインタビューや自らの文献調査などにより、利用者自らが IF の内容を充実させるべきものであることを認識しておかなければならない。製薬企業から得られる情報の科学的根拠を確認し、その客観性を見抜き、医療現場における適正使用を確保することは薬剤師の本務であり、IF を活用して日常業務を更に価値あるものにしていただきたい。

(2020 年 4 月改訂)

目 次

I. 概要に関する項目	1	5. 混入する可能性のある夾雑物	8
1. 開発の経緯	1	6. 製剤の各種条件下における安定性	8
2. 製品の治療学的特性	1	7. 調製法及び溶解後の安定性	9
3. 製品の製剤学的特性	1	8. 他剤との配合変化（物理化学的変化）	9
4. 適正使用に関して周知すべき特性	1	9. 溶出性	9
5. 承認条件及び流通・使用上の制限事項	1	10. 容器・包装	13
（1）承認条件	1	（1）注意が必要な容器・包装、外観が特殊な 容器・包装に関する情報	13
（2）流通・使用上の制限事項	2	（2）包装	13
6. RMP の概要	2	（3）予備容量	13
II. 名称に関する項目	3	（4）容器の材質	13
1. 販売名	3	11. 別途提供される資材類	13
（1）和名	3	12. その他	13
（2）洋名	3	V. 治療に関する項目	14
（3）名称の由来	3	1. 効能又は効果	14
2. 一般名	3	2. 効能又は効果に関連する注意	14
（1）和名（命名法）	3	3. 用法及び用量	14
（2）洋名（命名法）	3	（1）用法及び用量の解説	14
（3）ステム（stem）	3	（2）用法及び用量の設定経緯・根拠	14
3. 構造式又は示性式	3	4. 用法及び用量に関連する注意	14
4. 分子式及び分子量	3	5. 臨床成績	14
5. 化学名（命名法）又は本質	3	（1）臨床データパッケージ	14
6. 慣用名、別名、略号、記号番号	4	（2）臨床薬理試験	14
III. 有効成分に関する項目	5	（3）用量反応探索試験	14
1. 物理化学的性質	5	（4）検証的試験	15
（1）外観・性状	5	（5）患者・病態別試験	15
（2）溶解性	5	（6）治療的使用	16
（3）吸湿性	5	（7）その他	16
（4）融点（分解点）、沸点、凝固点	5	VI. 薬効薬理に関する項目	17
（5）酸塩基解離定数	5	1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群	17
（6）分配係数	5	2. 薬理作用	17
（7）その他の主な示性値	5	（1）作用部位・作用機序	17
2. 有効成分の各種条件下における安定性	5	（2）薬効を裏付ける試験成績	17
3. 有効成分の確認試験法、定量法	5	（3）作用発現時間・持続時間	18
IV. 製剤に関する項目	7	VII. 薬物動態に関する項目	19
1. 剤形	7	1. 血中濃度の推移	19
（1）剤形の区別	7	（1）治療上有効な血中濃度	19
（2）製剤の外観及び性状	7	（2）臨床試験で確認された血中濃度	19
（3）識別コード	7	（3）中毒域	21
（4）製剤の物性	7	（4）食事・併用薬の影響	21
（5）その他	7	2. 薬物速度論的パラメータ	21
2. 製剤の組成	7	（1）解析方法	21
（1）有効成分（活性成分）の含量及び添加剤	7	（2）吸収速度定数	22
（2）電解質等の濃度	7	（3）消失速度定数	22
（3）熱量	8	（4）クリアランス	22
3. 添付溶解液の組成及び容量	8	（5）分布容積	22
4. 力価	8		

(6) その他	22	(2) 非臨床試験に基づく情報	31
3. 母集団（ポピュレーション）解析	22	IX. 非臨床試験に関する項目	32
(1) 解析方法	22	1. 薬理試験	32
(2) パラメータ変動要因	22	(1) 薬効薬理試験	32
4. 吸収	22	(2) 安全性薬理試験	32
5. 分布	22	(3) その他の薬理試験	32
(1) 血液－脳関門通過性	22	2. 毒性試験	32
(2) 血液－胎盤関門通過性	22	(1) 単回投与毒性試験	32
(3) 乳汁への移行性	22	(2) 反復投与毒性試験	32
(4) 髄液への移行性	22	(3) 遺伝毒性試験	32
(5) その他の組織への移行性	22	(4) がん原性試験	32
(6) 血漿蛋白結合率	23	(5) 生殖発生毒性試験	32
6. 代謝	23	(6) 局所刺激性試験	32
(1) 代謝部位及び代謝経路	23	(7) その他の特殊毒性	32
(2) 代謝に関与する酵素（CYP 等）の分子種、 寄与率	23	X. 管理的事項に関する項目	33
(3) 初回通過効果の有無及びその割合	23	1. 規制区分	33
(4) 代謝物の活性の有無及び活性比、存在比 率	23	2. 有効期間	33
7. 排泄	23	3. 包装状態での貯法	33
8. トランスポーターに関する情報	23	4. 取扱い上の注意	33
9. 透析等による除去率	23	5. 患者向け資材	33
10. 特定の背景を有する患者	23	6. 同一成分・同効薬	33
11. その他	24	7. 国際誕生年月日	33
VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目	25	8. 製造販売承認年月日及び承認番号、薬価基準 収載年月日、販売開始年月日	33
1. 警告内容とその理由	25	9. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等 の年月日及びその内容	33
2. 禁忌内容とその理由	25	10. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその 内容	33
3. 効能又は効果に関連する注意とその理由	25	11. 再審査期間	34
4. 用法及び用量に関連する注意とその理由	25	12. 投薬期間制限に関する情報	34
5. 重要な基本的注意とその理由	25	13. 各種コード	34
6. 特定の背景を有する患者に関する注意	25	14. 保険給付上の注意	34
(1) 合併症・既往歴等のある患者	25	XI. 文献	35
(2) 腎機能障害患者	26	1. 引用文献	35
(3) 肝機能障害患者	26	2. その他の参考文献	36
(4) 生殖能を有する者	26	XII. 参考資料	37
(5) 妊婦	26	1. 主な外国での発売状況	37
(6) 授乳婦	26	2. 海外における臨床支援情報	37
(7) 小児等	27	XIII. 備考	38
(8) 高齢者	27	1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあ たつての参考情報	38
7. 相互作用	27	(1) 粉碎	38
(1) 併用禁忌とその理由	27	(2) 崩壊・懸濁性及び経管投与チューブの通 過性	38
(2) 併用注意とその理由	27	2. その他の関連資料	38
8. 副作用	29	(1) 提供用資料	38
(1) 重大な副作用と初期症状	29	(2) GS1 コード	38
(2) その他の副作用	30		
9. 臨床検査結果に及ぼす影響	31		
10. 過量投与	31		
11. 適用上の注意	31		
12. その他の注意	31		
(1) 臨床使用に基づく情報	31		

I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯

アトルバスタチンカルシウム錠は HMG-CoA 還元酵素阻害剤であり、コレステロール生合成の律速酵素である HMG-CoA 還元酵素を選択的に阻害することによってコレステロールの生合成を抑制する。本邦では 2000 年 5 月に上市され、広く臨床で使用されている。

アトルバスタチン錠 5mg「NS」及びアトルバスタチン錠 10mg「NS」は、アトルバスタチンカルシウム水和物を主成分とする後発医薬品として日新製薬株式会社が開発を企画し、薬食発第 0331015 号（2005 年 3 月 31 日）に基づき、規格及び試験方法を設定、加速試験、生物学的同等性試験を実施し、2013 年 2 月に承認を得て、2013 年 6 月に発売に至った。

なお、有効成分であるアトルバスタチンカルシウム水和物及びアトルバスタチンカルシウム錠は第十六改正日本薬局方に収載された。

2. 製品の治療学的特性

- 1) アトルバスタチンは血液中のコレステロール量を調節する主要臓器である肝臓の HMG-CoA 還元酵素を選択的かつ競合的に阻害し、アトルバスタチンと同程度の活性を有する代謝物とともに、肝臓のコレステロール合成を抑制する。その結果、アトルバスタチンは肝臓の LDL 受容体数を増加させ、かつリポ蛋白分泌を抑制することにより血中脂質量を低下させる。また、アトルバスタチンは血中脂質動態を改善して、高コレステロール血症に伴う動脈硬化の発症を抑制する¹⁾。（「VI. 2. (1) 作用部位・作用機序」の項参照）
- 2) 重大な副作用として、横紋筋融解症、ミオパチー、免疫介在性壊死性ミオパチー、劇症肝炎、肝炎、肝機能障害、黄疸、過敏症、無顆粒球症、汎血球減少症、血小板減少症、中毒性表皮壊死融解症（Toxic Epidermal Necrolysis : TEN）、皮膚粘膜眼症候群（Stevens-Johnson 症候群）、多形紅斑、高血糖、糖尿病、間質性肺炎、重症筋無力症が報告されている。（「VIII. 8. (1) 重大な副作用と初期症状」の項参照）

3. 製品の製剤学的特性

該当資料なし

4. 適正使用に関して周知すべき特性

適正使用に関する資材、 最適使用推進ガイドライン等	有無
医薬品リスク管理計画（RMP）	無
追加のリスク最小化活動として 作成されている資材	無
最適使用推進ガイドライン	無
保険適用上の留意事項通知	無

5. 承認条件及び流通・使用上の制限事項

(1) 承認条件

該当しない

(2) 流通・使用上の制限事項

該当しない

6. RMP の概要

該当しない

II. 名称に関する項目

1. 販売名

(1) 和名

アトルバスタチン錠 5mg 「NS」
アトルバスタチン錠 10mg 「NS」

(2) 洋名

Atorvastatin Tablets 5mg “NS”
Atorvastatin Tablets 10mg “NS”

(3) 名称の由来

「有効成分名」＋「剤形」＋「規格」＋「屋号」より命名。

2. 一般名

(1) 和名（命名法）

アトルバスタチンカルシウム水和物（JAN）

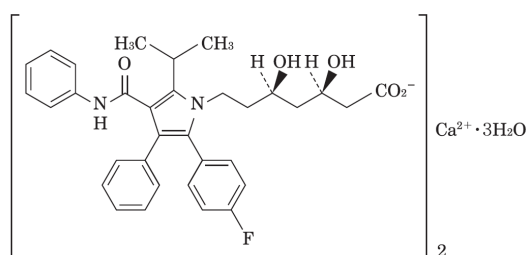
(2) 洋名（命名法）

Atorvastatin Calcium Hydrate（JAN）、Atorvastatin（INN）

(3) ステム（stem）

-vastatin（高脂血症治療剤、HMG-CoA 還元酵素阻害剤）

3. 構造式又は示性式



4. 分子式及び分子量

分子式： $\text{C}_{66}\text{H}_{68}\text{CaF}_2\text{N}_4\text{O}_{10} \cdot 3\text{H}_2\text{O}$
分子量：1209.39

5. 化学名（命名法）又は本質

Monocalcium bis {(3*R*, 5*R*)-7-[2-(4-fluorophenyl)-5-(1-methylethyl)-3-phenyl-4-(phenylcarbamoyl)-1*H*-pyrrol-1-yl]-3,5-dihydroxyheptanoate} trihydrate (IUPAC)

6. 慣用名、別名、略号、記号番号

CAS登録番号：344423-98-9 (Atorvastatin Calcium Hydrate)

134523-03-8 (Atorvastatin Calcium)

134523-00-5 (Atorvastatin)

III. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質

(1) 外観・性状

白色～微黄白色の結晶性の粉末である。

(2) 溶解性

溶 媒	1g を溶かすのに要する溶媒量	日本薬局方の溶解度表 記
メタノール	1mL 未満	極めて溶けやすい
ジメチルスルホキシド	1mL 以上 10mL 未満	溶けやすい
水、エタノール (99.5)	1000mL 以上 10000mL 未満	極めて溶けにくい

(3) 吸湿性

該当資料なし

(4) 融点（分解点）、沸点、凝固点

該当資料なし

(5) 酸塩基解離定数

該当資料なし

(6) 分配係数

該当資料なし

(7) その他の主な示性値

旋光度 $[\alpha]_D^{25}$: $-7 \sim -10^\circ$ (脱水物に換算したもの 0.2g、ジメチルスルホキシド、20mL、100mm)

光によって徐々に黄白色となる。

結晶多形が認められる。

2. 有効成分の各種条件下における安定性

該当資料なし

3. 有効成分の確認試験法、定量法

確認試験法：

日本薬局方「アトルバスタチンカルシウム水和物」の確認試験法による

- ・紫外可視吸光度測定法
- ・赤外吸収スペクトル測定法
- ・カルシウム塩の定性反応

定量法：

日本薬局方「アトルバスタチンカルシウム水和物」の定量法による

Ⅲ. 有効成分に関する項目

- ・液体クロマトグラフィー

IV. 製剤に関する項目

1. 剤形

(1) 剤形の区別

フィルムコーティング錠

(2) 製剤の外観及び性状

販売名	アトルバスタチン錠 5mg 「NS」	アトルバスタチン錠 10mg 「NS」
性状	ごくうすい紅色のフィルムコーティング錠	白色のフィルムコーティング錠
外形	  	  
大きさ	直径：6.1mm 厚さ：3.1mm 重量：94mg	直径：7.1mm 厚さ：3.5mm 重量：136mg

(3) 識別コード

本体表示：

アトルバスタチン錠 5mg 「NS」 : アトルバスタチン 5 NS (錠剤表面)

アトルバスタチン錠 10mg 「NS」 : アトルバスタチン 10 NS (錠剤表面)

(4) 製剤の物性

該当資料なし

(5) その他

該当資料なし

2. 製剤の組成

(1) 有効成分（活性成分）の含量及び添加剤

販売名	アトルバスタチン錠 5mg 「NS」	アトルバスタチン錠 5mg 「NS」
有効成分	1 錠中日本薬局方アトルバスタチンカルシウム水和物 5.42mg (アトルバスタチンとして 5mg)	1 錠中日本薬局方アトルバスタチンカルシウム水和物 10.84mg (アトルバスタチンとして 10mg)
添加剤	乳糖水和物、含水二酸化ケイ素、ヒドロキシプロピルセルロース、ステアリン酸マグネシウム、ヒプロメロース、マクロゴール、酸化チタン、タルク、三二酸化鉄、カルナウバロウ	乳糖水和物、含水二酸化ケイ素、ヒドロキシプロピルセルロース、ステアリン酸マグネシウム、ヒプロメロース、マクロゴール、酸化チタン、タルク、カルナウバロウ

(2) 電解質等の濃度

該当しない

(3) 熱量

該当しない

3. 添付溶解液の組成及び容量

該当しない

4. 力価

該当しない

5. 混入する可能性のある夾雑物

該当資料なし

6. 製剤の各種条件下における安定性

アトルバスタチン錠 5mg「NS」及びアトルバスタチン錠 10mg「NS」は、最終包装製品を用いた加速試験の結果、室温保存において 3 年間安定であることが推測された^{2,3)}。

製品名	保存条件	包装形態	保存期間	結果
アトルバスタチン錠 5mg「NS」	40±1℃ 75±5%RH	最終包装製品 (PTP 包装)	6 ヶ月	適合※
アトルバスタチン錠 10mg「NS」				

※性状、確認試験、純度試験、製剤均一性試験（含量均一性試験）溶出性、定量

【無包装状態での安定性試験】

試験項目：外観、純度試験、溶出性、定量、硬度

製品名	保存条件	包装形態	保存期間	結果
アトルバスタチン錠 5mg「NS」	40℃	遮光・密栓	3 ヶ月	規格内であった
	30℃、75% RH	遮光・開放	2 ヶ月	類縁物質の増加がみられた
	1000lx	—	総照射量 120 万 lx・hr (約 50 日)	類縁物質の増加がみられた
	温度・湿度 成り行き	遮光・開放	約 50 日	規格内であった
	室内散乱光	開放	2 ヶ月	類縁物質の増加がみられた
アトルバスタチン錠 10mg「NS」	40℃	遮光・密栓	3 ヶ月	規格内であった
	30℃、75% RH	遮光・開放	2 ヶ月	類縁物質の増加がみられた
	1000lx	—	総照射量 120 万 lx・hr (約 50 日)	類縁物質の増加がみられた

	温度・湿度 成り行き	遮光・開放	約 50 日	規格内で あった
	室内散乱光	開放	3 ヶ月	類縁物質 の増加が みられた

7. 調製法及び溶解後の安定性

該当しない

8. 他剤との配合変化（物理化学的变化）

該当資料なし

9. 溶出性

アトルバスタチン錠 5mg 「NS」⁴⁾

【日本薬局方に基づく試験】

試験液に水 900mL を用い、日局一般試験法 溶出試験法のパドル法（75rpm）で試験を行うとき、本剤は日本薬局方医薬品各条に定められたアトルバスタチンカルシウム錠の溶出規格に適合していることが確認されている（15 分間の溶出率が 80%以上）。

【溶出挙動における類似性（「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」：平成 18 年 11 月 24 日付 薬食審査発第 1124004 号 別紙 1）】

①試験法：日本薬局方一般試験法溶出試験法 パドル法

②試験条件

試験液量：900mL 測定方法：液体クロマトグラフィー

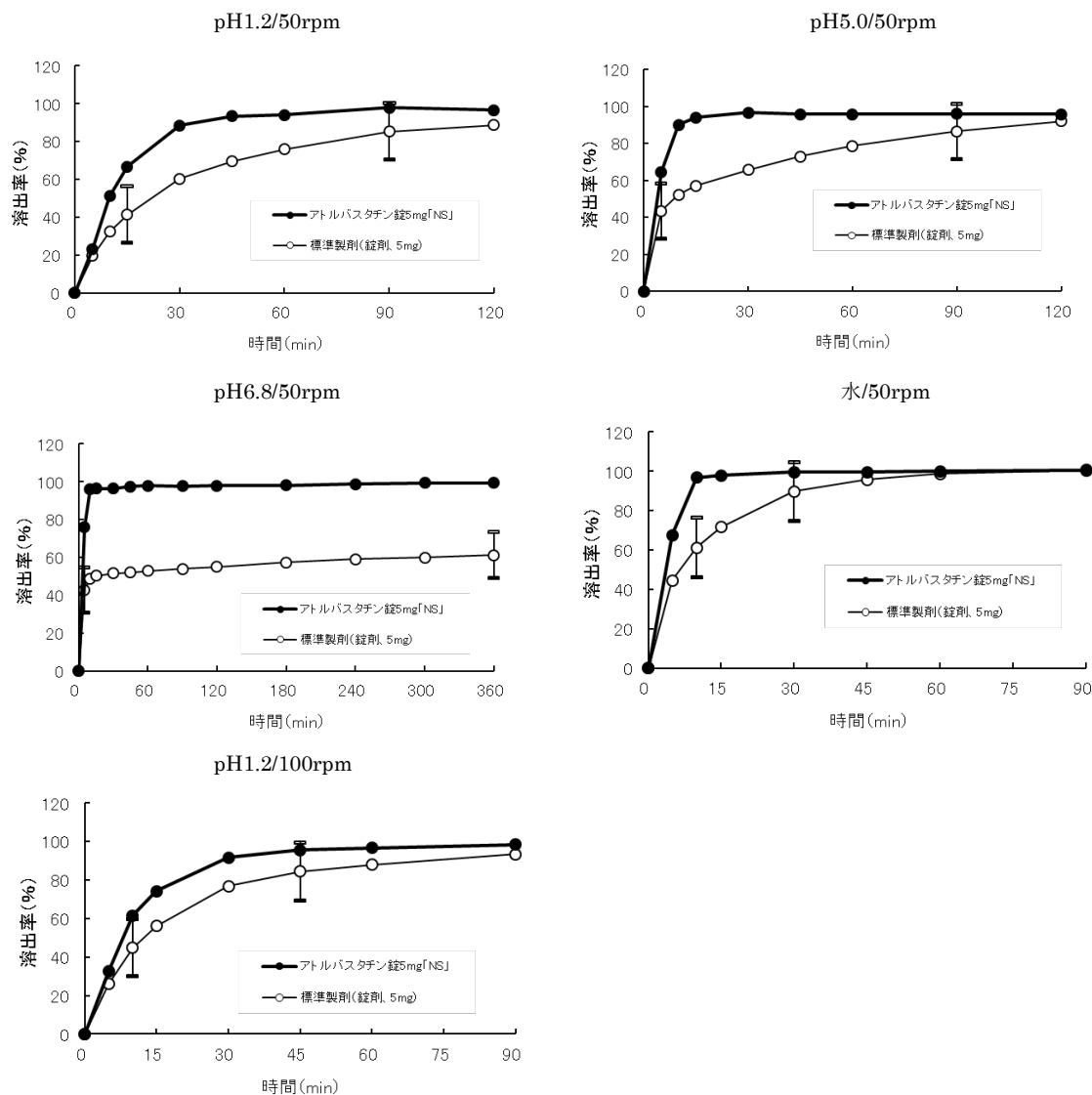
各種条件：

各種条件：

試験液	サンプリング時間（分）	回転数
pH1.2	5,10,15,30,45,60,90,120	50rpm
pH5.0		
pH6.8	5,10,15,30,45,60,90,120,180,240,300,360	
水	5,10,15,30,45,60,90	100rpm
pH1.2		
試験液温	37.0±0.5℃	
ベッセル数	12 ベッセル	

③試験結果：アトルバスタチン錠 5mg 「NS」と標準製剤の溶出挙動は、いずれの試験条件においても、類似性の判定基準に適合しないことが確認された。しかしながら、前述のガイドラインにおいて、「溶出試験による類似性の判定は、生物学的に同等であることを意味するものではない」とされており、健康成人男子を対象とした生物学的同等性試験（血漿中濃度比較試験）にて、両製剤は生物学的に同等であることが確認されている。

IV. 製剤に関する項目

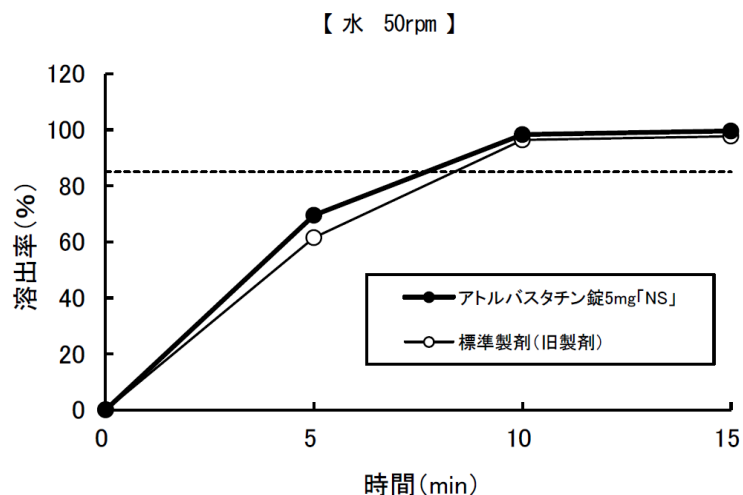


【製法変更前後の生物学的同等性（溶出挙動の同等性）】

アトルバスタチン錠 5mg「NS」について、製法変更に伴い、「経口固形製剤の製法変更の生物学的同等性試験に係る考え方（平成 25 年 4 月 19 日厚生労働省医薬食品局審査管理課事務連絡）」の第 3 章「製法変更水準と要求される試験」の「2. 要求される試験」のレベル 2 に従い、旧製剤を標準製剤として溶出試験を行った。なお、旧製剤は、上記試験により標準製剤（錠剤、アトルバスタチンとして 5mg）との同等性が確認されている。結果は以下のとおりであり、平均溶出率及び個々の溶出率ともに判定基準を全て満たし溶出挙動が同等と判断されたため、両製剤は生物学的に同等とみなされた。

1) 平均溶出率：適合

回転数	試験液	平均溶出率の判定
パドル法/50rpm	水	15 分以内に平均 85%以上溶出した。



2) 個々の溶出率：適合

回転数	試験液	平均溶出率の判定
パドル法/50rpm	水	試験製剤の個々の溶出率は、最終比較時点において、試験製剤の平均溶出率 $\pm 15\%$ の範囲を超えるものが12個中1個以下で、 $\pm 25\%$ の範囲を超えるものはなかった。

アトルバスタチン錠 10mg 「NS」⁵⁾

【日本薬局方に基づく試験】

試験液に水 900mL を用い、日局一般試験法 溶出試験法のパドル法 (75rpm) で試験を行うとき、本剤は日本薬局方医薬品各条に定められたアトルバスタチンカルシウム錠の溶出規格に適合していることが確認されている (15 分間の溶出率が 80%以上)。

【溶出挙動における類似性 (「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン」：平成 18 年 11 月 24 日付 薬食審査発第 1124004 号 別紙 1)】

①試験法：日本薬局方一般試験法溶出試験法 パドル法

②試験条件

試験液量：900mL 測定方法：液体クロマトグラフィー

各種条件：

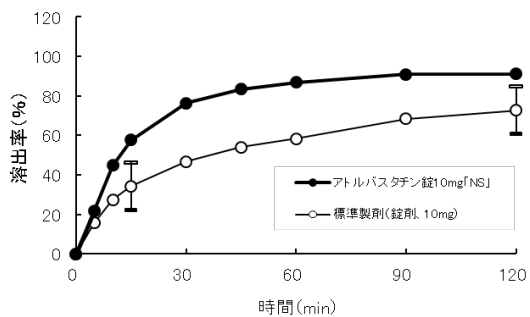
試験液	サンプリング時間 (分)	回転数
pH1.2	5,10,15,30,45,60,90,120	50rpm
pH5.0		
pH6.8		
水		
pH5.0	5,10,15,30	100rpm
試験液温	37.0 $\pm$ 0.5℃	
ベッセル数	12 ベッセル	

③試験結果：アトルバスタチン錠 10mg 「NS」と標準製剤の溶出挙動は、pH5.0、100rpm においてのみ類似性の判定基準に適合し、その他の試験条件においては適合しないことが確認された。しかしながら、前述のガイドラインにおいて、「溶出試験による類似性の判定は、生物学的に同等であることを意味するものではない」とされており、健康成人男子を対象とした生物学的同等性試験 (血漿中濃度比較試験) にて、両製剤は生物学的に同等であることが確認されている。

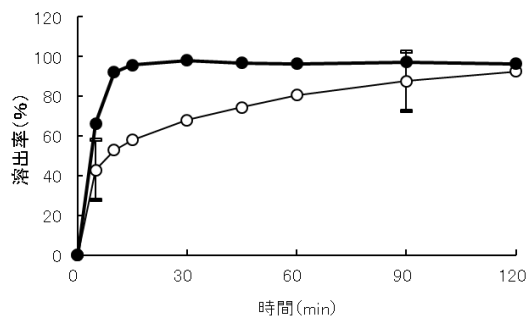
pH1.2/50rpm

pH5.0/50rpm

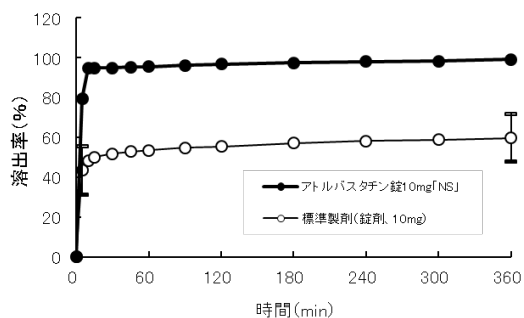
IV. 製剤に関する項目



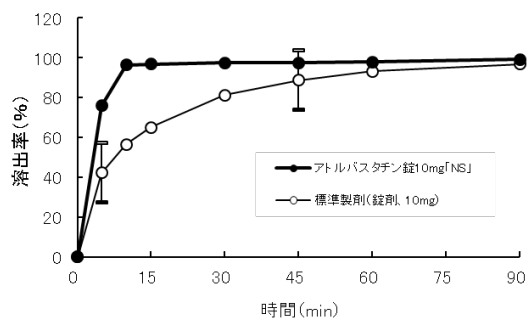
pH6.8/50rpm



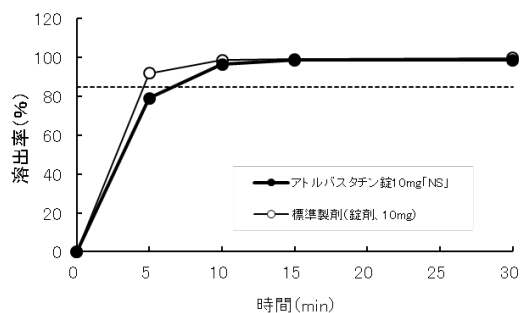
水/50rpm



pH5.0/100rpm



時間 (min)



時間 (min)

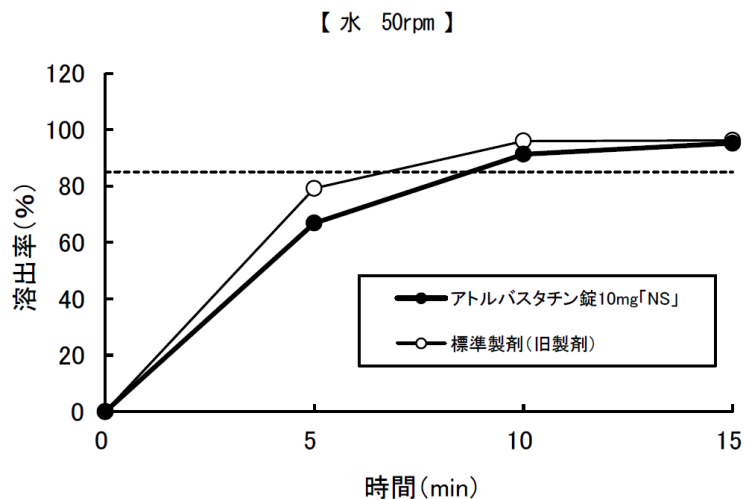
【製法変更前後の生物学的同等性（溶出挙動の同等性）】

アトルバスタチン錠 10mg「NS」について、製法変更に伴い、「経口固形剤の製法変更の生物学的同等性試験に係る考え方（平成 25 年 4 月 19 日厚生労働省医薬食品局審査管理課事務連絡）」の第 3 章「製法変更水準と要求される試験」の「2. 要求される試験」のレベル 2 に従い、旧製剤を標準製剤として溶出試験を行った。なお、旧製剤は、上記試験により標準製剤（錠剤、アトルバスタチンとして 10mg）との同等性が確認されている。

結果は以下のとおりであり、平均溶出率及び個々の溶出率ともに判定基準を全て満たし溶出挙動が同等と判断されたため、両製剤は生物学的に同等とみなされた。

(1) 平均溶出率：適合

回転数	試験液	平均溶出率の判定
パドル法/50rpm	水	15 分以内に平均 85%以上溶出した。



(2) 個々の溶出率：適合

回転数	試験液	平均溶出率の判定
パドル法/50rpm	水	試験製剤の個々の溶出率は、最終比較時点において、試験製剤の平均溶出率 $\pm 15\%$ の範囲を超えるものが12個中1個以下で、 $\pm 25\%$ の範囲を超えるものはなかった。

10. 容器・包装

(1) 注意が必要な容器・包装、外観が特殊な容器・包装に関する情報

該当しない

(2) 包装

〈アトルバスタチン錠 5mg 「NS」〉

100 錠 [10 錠 (PTP) $\times$ 10]

〈アトルバスタチン錠 10mg 「NS」〉

100 錠 [10 錠 (PTP) $\times$ 10]

(3) 予備容量

該当しない

(4) 容器の材質

PTP：ポリ塩化ビニル、アルミニウム

ピロー：ポリエチレンラミネートアルミニウム

個装箱：紙

11. 別途提供される資材類

該当しない

12. その他

該当資料なし

V. 治療に関する項目

1. 効能又は効果

- 高コレステロール血症
- 家族性高コレステロール血症

2. 効能又は効果に関連する注意

5. 効能又は効果に関連する注意

- 5.1 適用の前に十分な検査を実施し、高コレステロール血症、家族性高コレステロール血症であることを確認した上で本剤の適用を考慮すること。
- 5.2 家族性高コレステロール血症ホモ接合体については、LDL・アフェレーシス等の非薬物療法の補助として、あるいはそれらの治療法が実施不能な場合に本剤の適用を考慮すること。

3. 用法及び用量

(1) 用法及び用量の解説

6. 用法及び用量

〈高コレステロール血症〉

通常、成人にはアトルバスタチンとして 10mg を 1 日 1 回経口投与する。

なお、年齢、症状により適宜増減するが、重症の場合は 1 日 20mg まで増量できる。

〈家族性高コレステロール血症〉

通常、成人にはアトルバスタチンとして 10mg を 1 日 1 回経口投与する。

なお、年齢、症状により適宜増減するが、重症の場合は 1 日 40mg まで増量できる。

(2) 用法及び用量の設定経緯・根拠

＜副作用等による減量・中止規定＞

「VIII. 5. 重要な基本的注意とその理由」及び「VIII. 8. 副作用」の項参照

4. 用法及び用量に関連する注意

設定されていない

5. 臨床成績

(1) 臨床データパッケージ

該当資料なし

(2) 臨床薬理試験

該当資料なし

(3) 用量反応探索試験

該当資料なし

(4) 検証的試験

1) 有効性検証試験

有効性及び安全性に関する試験

〈高コレステロール血症〉

国内後期第Ⅱ相試験

高脂血症患者 243 例を対象に、アトルバスタチン錠を 1 日 1 回夕食後 12 週間投与した際の血清脂質改善作用の用量反応関係および安全性を 4 用量 (2.5mg、5mg、10mg または 20mg) による二重盲検群間比較法により実施した。アトルバスタチン錠 5^{注)} ～ 20mg を 1 日 1 回夕食後に投与した際の血清脂質値の変化率及び総コレステロール < 220mg/dL となった症例の割合 (総コレステロール < 220mg/dL 割合)、LDL-コレステロール < 150mg/dL となった症例の割合 (LDL-コレステロール < 150mg/dL 割合) は下記のとおりである。

用量 (mg)	例数	総コレステロール (%)	トリグリセリド (%)	HDL-コレステロール (Δmg/dL)
5	51	-25.0	-19.7	3.2
10	51	-30.2	-16.7	5.2
20	52	-33.8	-12.0	6.1

用量 (mg)	例数	LDL-コレステロール (%)	総コレステロール < 220mg/dL 割合 (%)	LDL-コレステロール < 150mg/dL 割合 (%)
5	51	-32.0	56.9	74.5
10	51	-39.6	72.5	86.3
20	52	-49.5	86.5	90.4

副作用及び関連性が否定されなかった臨床検査値異常変動の発現率はそれぞれ 5.0～12.1%及び 33.3～46.6%であり、臨床検査値異常変動発現率が 20mg 群でやや高かったものの、用量依存性は認められなかった。

主な副作用は胃部不快感 2 例 (2.5mg, 10mg 各 1 例)、一般的全身症状 2 例 (2.5mg, 20mg 各 1 例) であった。なお、重篤な臨床検査値異常変動の発現は認められなかった^{6, 7)}。

注) 本剤の承認された用法及び用量は、アトルバスタチンとして 10mg を 1 日 1 回経口投与である。なお、年齢、症状により適宜増減できるが、重症の場合は、高コレステロール血症で 1 日 20mg まで、家族性高コレステロール血症で 1 日 40mg までの増量である。

2) 安全性試験

該当資料なし

(5) 患者・病態別試験

〈家族性高コレステロール血症〉

①家族性高コレステロール血症患者ヘテロ対象試験 (国内)

家族性高コレステロール血症ヘテロ接合体患者 24 例にアトルバスタチン錠 10mg を 8 週間投与し、その後、8 週間毎に 20mg、40mg へと漸増し、非盲検・非比較試験にて検討した。その結果、10mg 及び 40mg で総コレステロールはそれぞれ -31.8%、-41.1%、LDL-コレステロールはそれぞれ -37.7%、-48.3% と低下し増量効果が得られた。副作用は 16.7% (4/24 例)、関連性が否定されなかった臨床検査値異常変動は 41.7% (10/24 例) に認められた。主な副作用は、軟便傾向・軟便 (2 例) であった。なお、重篤な副作用及び臨床検査値異常変動の発現は認められなかった^{8, 9)}。

②家族性高コレステロール血症患者ホモ対象試験 (国内)

LDL-アフェレーシスを施行している家族性高コレステロール血症ホモ接合体患者 9 例に、

アトルバスタチン錠 10mg を 8 週間投与し、その後 20mg (8 週間)、40mg (8～20 週) へと漸増し、非盲検・非比較試験にて検討した。その結果、6 例で総コレステロールが -31.4～-4.9%、LDL-コレステロールが -39.3～-4.6% と低下した。他の 3 例では総コレステロールが 1.2～15.2%、LDL-コレステロールが 3.1～11.8% と増加した。低下が認められた症例のうち 4 例ではアトルバスタチン錠投与前に 2 剤以上を併用した薬物療法とほぼ同程度の総コレステロール及び LDL-コレステロール低下が認められた。副作用は 11.1% (1/9 例)、関連性が否定されなかった臨床検査値異常変動は 44.4% (4/9 例) に認められ、副作用は、右手しびれ (感) であった。なお、重篤な副作用及び臨床検査値異常変動の発現は認められなかった¹⁰⁾。

③胆汁脂質に与える影響 (国内)

高脂血症患者 17 例を対象に非盲検・非比較試験としてアトルバスタチン錠 10mg を 12 週間投与した結果、投与前後のコレステロール飽和度、胆汁脂質濃度及び胆石形成指数に有意な変化はみられず、胆汁脂質組成に悪影響を及ぼさなかった。副作用は 6.3% (1/16 例)、関連性が否定されなかった臨床検査値異常変動は 25.0% (4/16 例) に認められた。副作用は、胃部不快感と鼓腸が同一症例に発現していた。なお、本試験において重篤な副作用及び臨床検査値異常変動の発現は認められなかった¹¹⁾。

④血液凝固線溶系に及ぼす影響 (国内)

高脂血症患者 20 例を対象にアトルバスタチン錠 10mg を非盲検・非比較試験として 28 週間投与した結果、凝固第Ⅶ因子活性及びその抗原量の有意な低下を認め血栓形成阻止傾向がみられた。一方、他の血液凝固線溶系パラメータに一定の傾向はみられなかったことより、全体として血液凝固線溶系には悪影響を及ぼさなかった。副作用は認められず、関連性が否定されなかった臨床検査値異常変動は 31.6% (6/19 例) に認められた¹²⁾。

⑤糖代謝に及ぼす影響 (国内)

高脂血症を合併した糖尿病患者 50 例 (プラセボ群 24 例、アトルバスタチン群 26 例) にアトルバスタチン錠 10mg 又はプラセボを二重盲検群間比較試験として 12 週間投与し、アトルバスタチンの有効性および安全性を検討した。アトルバスタチン錠を 12 週間投与した結果、HbA1c、1,5-AG 及びフルクトサミンに対する変化は、アトルバスタチン群とプラセボ群との間に有意差は認められなかったことから、アトルバスタチンは糖代謝に対する影響はなかった。副作用は、プラセボ群、アトルバスタチン群とも 5.3% (1/19 例) にみられ、関連性が否定されなかった臨床検査値異常変動はプラセボ群 26.3% (5/19 例)、アトルバスタチン群 21.1% (4/19 例) に認められた。副作用は、プラセボ群が死亡、アトルバスタチン群が胸痛であった。なお、重篤な副作用及び臨床検査値異常変動の発現は認められなかった¹³⁾。

(6) 治療的使用

1) 使用成績調査 (一般使用成績調査、特定使用成績調査、使用成績比較調査)、製造販売後データベース調査、製造販売後臨床試験の内容

該当資料なし

2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した調査・試験の概要

該当資料なし

(7) その他

VI. 薬効薬理に関する項目

1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群

HMG-CoA 還元酵素阻害剤（プラバスタチンナトリウム、シンバスタチン、フルバスタチンナトリウム、ピタバスタチンカルシウム、ロスバスタチンカルシウム）

注意：関連のある化合物の効能・効果等は、最新の添付文書を参照すること。

2. 薬理作用

（１）作用部位・作用機序

アトルバスタチンは血液中のコレステロール量を調節する主要臓器である肝臓のHMG-CoA還元酵素を選択的かつ競合的に阻害し、アトルバスタチンと同程度の活性を有する代謝物とともに、肝臓のコレステロール合成を抑制する。その結果、アトルバスタチンは肝臓のLDL受容体数を増加させ、かつリポ蛋白分泌を抑制することにより血中脂質量を低下させる。また、アトルバスタチンは血中脂質動態を改善して、高コレステロール血症に伴う動脈硬化の発症を抑制する¹⁾。

（２）薬効を裏付ける試験成績

1) コレステロール合成抑制作用

ヒト肝癌細胞由来 HepG2 細胞において、アトルバスタチンはコレステロールの生合成経路の律速酵素である HMG-CoA 還元酵素を選択的かつ競合的に阻害し、酢酸からのコレステロール合成を濃度依存的に抑制した¹⁴⁾。
更にアトルバスタチンは経口投与により、ラットの肝コレステロール合成を類薬と比較して長く抑制した¹⁵⁾。

2) 高脂血症モデル動物における脂質低下作用

・コレステロール低下作用

コレステロール負荷ウサギ及びコレステロール負荷ミニブタにおいて、アトルバスタチンは経口投与により血漿総コレステロール値を低下させるとともに、LDL-コレステロール値及び血漿アポ B 値を低下させた^{16,17)}。LDL 受容体欠損マウス及び WHHL ウサギにおいて、アトルバスタチンは血漿総コレステロール値及び LDL-コレステロール値を低下させた^{18,19)}。

・トリグリセリド低下作用

コレステロール負荷ミニブタ及びショ糖負荷高トリグリセリド血症ラットにおいて、アトルバスタチンは血中トリグリセリド値を低下させた^{17,20)}。

3) 動脈硬化進展抑制作用

コレステロール負荷内皮傷害ウサギ及び WHHL ウサギにおいて、アトルバスタチンは動脈硬化病変面積及び血管壁コレステロール含量を低下させた^{16,19)}。

4) 代謝物の薬理作用

ラット肝ミクロソームにおいて、ヒトにおける主代謝物であるアミド結合位置のベンゼン環の 4 位の水酸化体（M-1）及び 2 位の水酸化体（M-2）は、アトルバスタチンと同程度の HMG-CoA 還元酵素阻害活性を示した²¹⁾。

5) リポ蛋白代謝に対する作用

HepG2 細胞において、アトルバスタチンは細胞内コレステロール含量を低下させるとともに、肝 LDL 受容体 mRNA 発現量及び肝 LDL 受容体活性を増加させ、アポ B 分泌量及びトリグリセリド分泌量を低下させた^{22,23)}。正常モルモットにおいて、アトルバスタチン

は肝 LDL 受容体活性を増加させるとともに、VLDL-アポ B 分泌速度を低下させた²⁴⁾。コレステロール負荷ミニブタにおいて、アトルバスタチンは VLDL-アポ B 産生速度を低下させた¹⁷⁾。LDL 受容体欠損マウスにおいて、アトルバスタチンはコレステロール分泌速度を低下させた¹⁸⁾。シヨ糖負荷高トリグリセリド血症ラットにおいて、アトルバスタチンはトリグリセリド分泌速度を低下させた²⁰⁾。

(3) 作用発現時間・持続時間

該当資料なし

VII. 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移

(1) 治療上有効な血中濃度

該当資料なし

(2) 臨床試験で確認された血中濃度

1) 単回投与

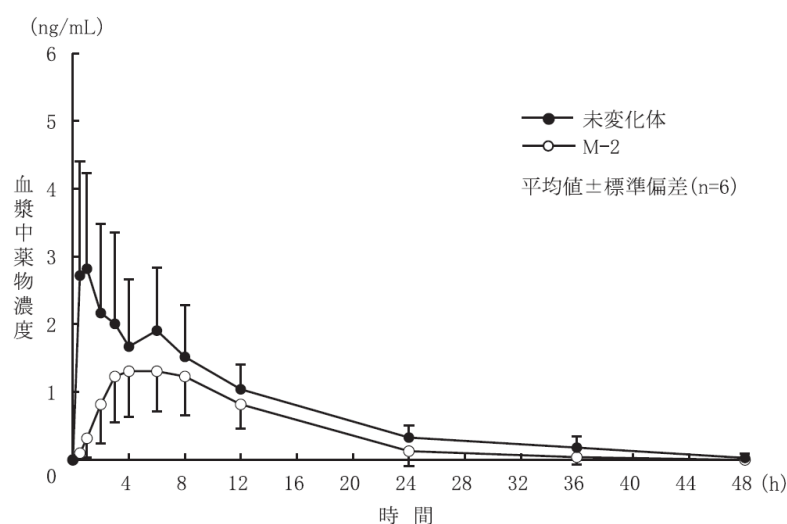
健康成人 6 例に、アトルバスタチン 5^{注)}、10、20 及び 40mg を絶食下单回経口投与した結果、血漿中未変化体の C_{max} 及び AUC_{0-∞} は投与量に比例して増加し、T_{max} 及び半減期はほぼ一定であったことから、アトルバスタチンの体内動態は線形性を示すと考えられた²⁵⁾。なお、日本人と外国人との体内動態を比較した結果、個人差を上回る人種差は認められなかった²⁶⁾。

薬物動態パラメータ

投与量 (mg/man)	C _{max} (ng/mL)	T _{max} (h)	t _{1/2} (h)	AUC _{0-∞} (ng・h/mL)
5	2.64±1.36	0.6±0.2	10.60±2.91	17.33±9.29
10	3.42±1.51	0.8±0.3	9.44±2.50	34.57±15.79
20	11.29±4.42	0.9±0.6	10.69±2.91	50.87±18.44
40	27.05±10.75	0.9±0.6	10.08±2.65	117.91±40.88

(平均値±標準偏差)

また、アトルバスタチン 10mg を健康成人 6 例に単回経口投与したときの血漿中主代謝物であるアミド結合位置のベンゼン環の 2 位の水酸化物 (M-2、*o*-OH 体) の T_{max}、C_{max} 及び半減期はそれぞれ 6.17 時間、1.39ng/mL 及び 8.00 時間であった²⁵⁾。



アトルバスタチンを健康成人に 10mg 単回投与したときの
血漿中未変化体及び M-2 濃度推移

注) 本剤の承認された用法及び用量は、アトルバスタチンとして 10mg を 1 日 1 回経口投与である。なお、年齢、症状により適宜増減できるが、重症の場合は、高コレステロール血症で 1 日 20mg まで、家族性高コレステロール血症で 1 日 40mg までの増量である。

2) 反復投与

健康成人 6 例に、アトルバスタチン 10 及び 20mg を 1 日 1 回朝食後、7 日間反復経口投与した結果、血漿中薬物濃度は投与開始後 4 日目までに定常状態に到達した。

また、1 日目と 7 日目の血漿中薬物濃度を比較すると、20mg 投与群で上昇しているものの有意な差ではなく、蓄積性は認められなかった²⁷⁾。

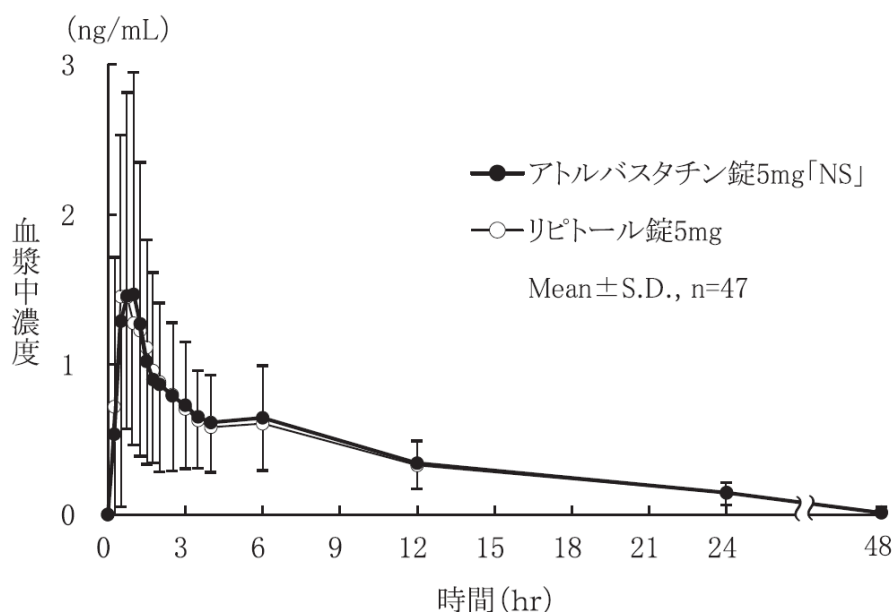
3) 生物学的同等性試験

アトルバスタチン錠 5mg 「NS」

アトルバスタチン錠 5mg 「NS」とリピトール錠 5mg を、クロスオーバー法によりそれぞれ 1 錠（アトルバスタチンとして 5mg）健康成人男子に絶食時単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ（AUC、Cmax）について 90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、 $\log(0.80) \sim \log(1.25)$ の範囲内であり、両製剤の生物学的同等性が確認された²⁸⁾。

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC ₀₋₄₈ (ng・hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	T _{1/2} (hr)
アトルバスタチン錠 5mg 「NS」	12.58±5.39	2.09±1.57	1.2±1.1	9.4±2.5
リピトール錠 5mg	12.32±5.74	2.07±1.14	0.8±0.5	10.0±2.9

(Mean±S.D., n=47)



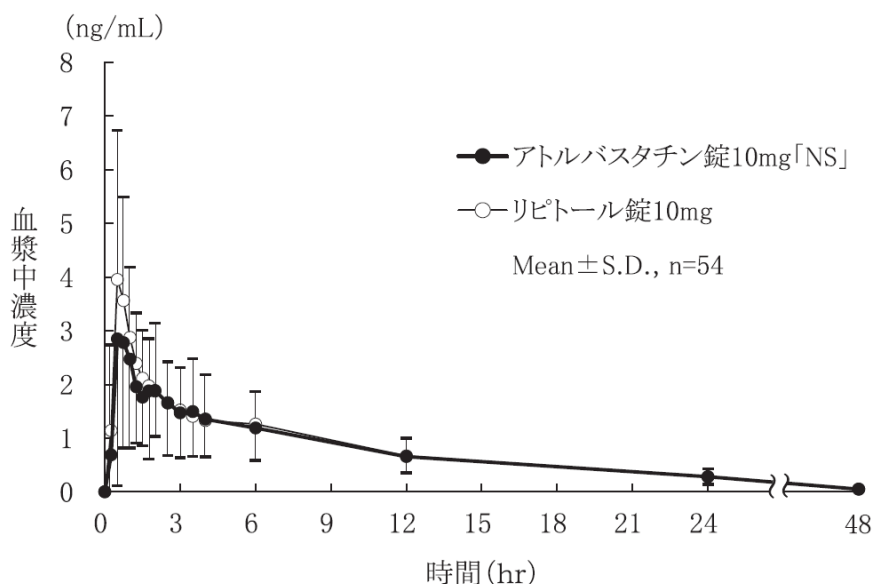
血漿中濃度並びに AUC、Cmax 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

アトルバスタチン錠 10mg 「NS」

アトルバスタチン錠 10mg 「NS」とリピトール錠 10mg を、クロスオーバー法によりそれぞれ 1 錠（アトルバスタチンとして 10mg）健康成人男子に絶食時単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定し、得られた薬物動態パラメータ（AUC、Cmax）について 90%信頼区間法にて統計解析を行った結果、 $\log(0.80) \sim \log(1.25)$ の範囲内であり、両製剤の生物学的同等性が確認された²⁹⁾。

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC ₀₋₄₈ (ng・hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	T _{1/2} (hr)
アトルバスタチン錠 10mg 「NS」	24.59±10.78	4.58±2.53	1.5±1.1	10.1±2.8
リピトール錠 10mg	25.86±11.02	4.90±2.40	0.9±0.7	10.1±3.2

(Mean±S.D., n=54)



血漿中濃度並びに AUC、Cmax 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

(3) 中毒域

該当資料なし

(4) 食事・併用薬の影響

健康成人 12 例でアトルバスタチン 10mg を絶食下及び食後に単回経口投与した結果、アトルバスタチンの吸収速度は食事により低下するものの、吸収率はほとんど影響を受けなかった³⁰⁾。

「VIII. 7. 相互作用」の項参照

2. 薬物速度論的パラメータ

(1) 解析方法

該当資料なし

(2) 吸収速度定数

該当資料なし

(3) 消失速度定数

該当資料なし

(4) クリアランス

該当資料なし

(5) 分布容積

該当資料なし

(6) その他

該当資料なし

3. 母集団（ポピュレーション）解析

(1) 解析方法

該当資料なし

(2) パラメータ変動要因

該当資料なし

4. 吸収

該当資料なし

5. 分布

(1) 血液－脳関門通過性

該当資料なし

(2) 血液－胎盤関門通過性

該当資料なし

(3) 乳汁への移行性

該当資料なし

<参考>

ラットで乳汁中への移行が報告されている。（「VIII. 6. (6) 授乳婦」の項参照）

(4) 髄液への移行性

該当資料なし

(5) その他の組織への移行性

該当資料なし

(6) 血漿蛋白結合率

ヒト血漿を用いた *in vitro* の実験で、蛋白結合率は 95.6～99.0%以上を示した³¹⁾。

6. 代謝

(1) 代謝部位及び代謝経路

健康成人 6 例にアトルバスタチン 10 及び 40mg を単回経口投与したとき、血漿中にアミド結合位置のベンゼン環の 4 位の水酸化体 (M-1) 及び 2 位の水酸化体 (M-2) の 2 種類が確認されているが、血漿中主活性代謝物は M-2 であった²⁵⁾。

(2) 代謝に関与する酵素 (CYP 等) の分子種、寄与率

アトルバスタチンの主要代謝臓器は肝臓であり、M-1 及び M-2 は CYP3A4 によって生成することが明らかにされている³²⁾。

(3) 初回通過効果の有無及びその割合

該当資料なし

(4) 代謝物の活性の有無及び活性比、存在比率

該当資料なし

7. 排泄

健康成人に ¹⁴C-アトルバスタチンを経口投与したとき、放射能の尿中排泄率は極めて低く (<2%)、糞中に未変化体、M-1 及び M-2 がそれぞれ糞中放射能の 8.3%、11.7%及び 18.2%排泄された^{33, 34)}。更に、¹⁴C-アトルバスタチンを用いたヒト胆汁中排泄試験では、投与された放射能の 43.7～70.2% が胆汁中に排泄され、未変化体の他に M-1、M-2 及び M-2 のグルクロン酸抱合体が同定された³⁵⁾。

8. トランスポーターに関する情報

本剤は、P-糖蛋白質 (P-gp)、乳癌耐性蛋白 (BCRP)、有機アニオントランスポーター (OATP) 1B1/1B3 の基質である。

9. 透析等による除去率

該当資料なし

10. 特定の背景を有する患者

(1) 腎機能障害患者

腎機能正常者 8 例及び腎機能障害者 11 例にアトルバスタチン 10mg を 1 日 1 回 2 週間反復経口投与したとき、腎機能障害は、アトルバスタチンの薬効及び体内動態に影響を及ぼさなかった³⁶⁾ (外国人データ)。

(2) 肝機能障害患者

健康成人及び肝硬変患者 8 例ずつにアトルバスタチン 10mg を 1 日 1 回 2 週間反復経口投与したとき、肝硬変患者では健康成人に比べて Child-Pugh A 患者及び Child-Pugh B 患者において、C_{max} ではそれぞれ 5.5 倍及び 14.4 倍、AUC_{0-24h} ではそれぞれ 4.4 倍及び 9.8 倍の増加、T_{max} ではいずれも 1/2 の短縮が認められたが半減期はほとんど変化しなかった。また、血清脂質に対する作用には差がなかった³⁷⁾ (外国人データ)。

(3) 高齢者

健康高齢者（66～73 歳）6 例及び若年者（20～22 歳）6 例に、アトルバスタチン 10mg を絶食下单回経口投与した結果、高齢者は若年者に比べて C_{max} 及び $AUC_{0-\infty}$ は約 2 倍に増加したが、 T_{max} 及び半減期に差は認められなかった³⁸⁾。

11. その他

該当資料なし

VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

1. 警告内容とその理由

設定されていない

2. 禁忌内容とその理由

2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

- 2.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- 2.2 肝代謝能が低下していると考えられる以下のような患者
急性肝炎、慢性肝炎の急性増悪、肝硬変、肝癌、黄疸 [9.3.1、16.6.2 参照]
- 2.3 妊婦又は妊娠している可能性のある女性及び授乳婦 [9.5、9.6 参照]
- 2.4 グレカプレビル・ピブレンタスビルを投与中の患者 [10.1 参照]

3. 効能又は効果に関連する注意とその理由

「V. 2. 効能又は効果に関連する注意」を参照すること。

4. 用法及び用量に関連する注意とその理由

設定されていない

5. 重要な基本的注意とその理由

8. 重要な基本的注意

- 8.1 あらかじめ高コレステロール血症治療の基本である食事療法を行い、更に運動療法や高血圧、喫煙等の虚血性心疾患のリスクファクターの軽減等も十分考慮すること。
- 8.2 投与中は血中脂質値を定期的に検査し、治療に対する反応が認められない場合には投与を中止すること。
- 8.3 劇症肝炎等の肝炎があらわれることがあるので、悪心・嘔吐、倦怠感等の症状があらわれた場合には本剤を中止し、医師等に連絡するよう患者に指導すること。投与中は投与開始又は増量時より 12 週までの間に 1 回以上、それ以降は定期的（半年に 1 回等）に肝機能検査を行うこと。[11.1.3 参照]
- 8.4 無顆粒球症、汎血球減少症、血小板減少症があらわれることがあるので、定期的に検査を行うなど十分な観察を行うこと。[11.1.5 参照]
- 8.5 高血糖、糖尿病があらわれることがあるので、口渇、頻尿、全身倦怠感等の症状の発現に注意するとともに、定期的に検査を行うなど十分な観察を行うこと。[11.1.7 参照]

6. 特定の背景を有する患者に関する注意

（1）合併症・既往歴等のある患者

9.1 合併症・既往歴等のある患者

9.1.1 糖尿病の患者

糖尿病を悪化させることがある。

9.1.2 横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある以下の患者

- ・ 甲状腺機能低下症の患者
- ・ 遺伝性の筋疾患（筋ジストロフィー等）又はその家族歴のある患者
- ・ 薬剤性の筋障害の既往歴のある患者

- ・ アルコール中毒の患者

[11.1.1 参照]

9.1.3 重症筋無力症又はその既往歴のある患者

重症筋無力症（眼筋型、全身型）が悪化又は再発することがある。[11.1.9 参照]

（２）腎機能障害患者

9.2 腎機能障害患者

9.2.1 腎障害又はその既往歴のある患者

横紋筋融解症の報告例の多くが腎機能障害を有する患者であり、また、横紋筋融解症に伴って急激な腎機能の悪化が認められている。[11.1.1 参照]

9.2.2 腎機能検査値異常のある患者

本剤とフィブラート系薬剤を併用する場合には、治療上やむを得ないと判断される場合にのみ併用すること。急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすい。やむを得ず併用する場合には、定期的に腎機能検査等を実施し、自覚症状（筋肉痛、脱力感）の発現、CK 上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇並びに血清クレアチニン上昇等の腎機能の悪化を認めた場合は直ちに投与を中止すること。[10.2、11.1.1 参照]

（３）肝機能障害患者

9.3 肝機能障害患者

9.3.1 肝代謝能が低下していると考えられる以下のような患者

急性肝炎、慢性肝炎の急性増悪、肝硬変、肝癌、黄疸

投与しないこと。本剤の血漿中濃度が上昇し、副作用の発現頻度が増加するおそれがある。また、本剤は主に肝臓において作用し代謝されるので、肝障害を悪化させるおそれがある。[2.2、16.6.2 参照]

9.3.2 肝障害又はその既往歴のある患者（9.3.1 に該当する患者を除く）

本剤は主に肝臓において作用し代謝されるので、肝障害を悪化させるおそれがある。[16.6.2 参照]

（４）生殖能を有する者

設定されていない

（５）妊婦

9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には投与しないこと。動物実験で出生児数の減少及び生存、発育に対する影響が認められ、胎児にも生存率低下と発育抑制が認められている。また、ラットに他の HMG-CoA 還元酵素阻害剤を大量投与した場合に胎児の骨格奇形が報告されている。更に、ヒトでは、他の HMG-CoA 還元酵素阻害剤で、妊娠 3 カ月までの間に服用したとき、胎児に先天性奇形があらわれたとの報告がある。[2.3 参照]

（６）授乳婦

9.6 授乳婦

授乳婦には投与しないこと。ラットで乳汁中への移行が報告されている。[2.3 参照]

(7) 小児等

9.7 小児等

小児等を対象とした有効性及び安全性を指標とした臨床試験は実施していない。

(8) 高齢者

9.8 高齢者

副作用が発現した場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。一般に生理機能が低下している。また、横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。[11.1.1、16.6.3 参照]

7. 相互作用

(1) 併用禁忌とその理由

本剤は、主として肝の薬物代謝酵素 CYP3A4 により代謝される。また、P-糖蛋白質 (P-gp)、乳癌耐性蛋白 (BCRP)、有機アニオントランスポーター (OATP) 1B1/1B3 の基質である。
[16.4 参照]

10.1 併用禁忌 (併用しないこと)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
グレカプレビル・ピブレンタスビル (マヴィレット) [2.4 参照]	グレカプレビル・ピブレンタスビル (400mg・120mg) との併用により、アトルバスタチンの AUC が 8.28 倍、Cmax が 22.0 倍に上昇したとの報告がある。本剤の血中濃度が上昇し、副作用が発現しやすくなるおそれがある。	機序：グレカプレビルの OATP1B1/1B3 及び BCRP 阻害、ピブレンタスビルの OATP1B1 及び BCRP 阻害に基づく作用によるものと考えられている。

(2) 併用注意とその理由

10.2 併用注意 (併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
フィブラート系薬剤 ベザフィブラート等 [9.2.2、11.1.1 参照]	筋肉痛、脱力感、CK 上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とし、急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。	機序：フィブラート系薬剤と HMG-CoA 還元酵素阻害剤との副作用誘発性の相加作用が示唆されている。 危険因子：腎機能に関する臨床検査値に異常が認められる患者
ニコチン酸製剤 ニセリトロール等 [11.1.1 参照]		機序：ニコチン酸製剤と HMG-CoA 還元酵素阻害剤との副作用誘発性の相加作用が示唆されている。 危険因子：腎機能障害
免疫抑制剤 シクロスポリン等 [11.1.1 参照]	1) 筋肉痛、脱力感、CK 上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とし、急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があ	機序：1) シクロスポリンと HMG-CoA 還元酵素阻害剤との副作用誘発性の相加作用、 2) シクロスポリンによる

	らわれやすいとの報告がある。 2) シクロスポリンとの併用により、本剤の AUC_{0-24h} が 8.7 倍に上昇したとの報告がある。	HMG-CoA 還元酵素阻害剤の代謝・胆汁中排泄に対する競合阻害に基づく相互作用、 3) シクロスポリンによる本剤の肝への取り込み阻害に基づく相互作用が示唆されている。 危険因子：腎機能障害
アゾール系抗真菌薬 イトラコナゾール等 エリスロマイシン [11.1.1 参照]	筋肉痛、脱力感、CK 上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とし、急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。	機序：アゾール系抗真菌薬又はエリスロマイシンの CYP3A に対する阻害作用が考えられている。 危険因子：腎機能障害
クラリスロマイシン	本剤の血漿中薬物濃度の有意な上昇 (C_{max} : +55.9%、 $AUC_{0-Tlast}$: +81.8%) がみられた。	機序：クラリスロマイシンの CYP3A4 に対する阻害作用が考えられている。
HIV プロテアーゼ阻害剤 ロピナビル・リトナビル等	ロピナビル・リトナビルとの併用により本剤の AUC が 5.88 倍に上昇するとの報告がある。	機序：これらの薬剤による CYP3A4 の阻害が考えられている。
ニルマトレルビル・リトナビル	併用により本剤の血中濃度が上昇するおそれがある。本剤の副作用が発現しやすくなるおそれがあるため、十分な観察を行いながら慎重に投与し、必要に応じて減量や休薬等の適切な措置を講ずること。	機序：本剤の代謝を競合的に阻害するためと考えられている。
エンシトレルビル フマル酸	併用により本剤の血中濃度が上昇し、副作用が発現しやすくなるおそれがある。	機序：エンシトレルビル フマル酸の CYP3A に対する阻害作用が考えられている。
グラゾプレビル	グラゾプレビル (200mg) との併用により本剤の血漿中薬物濃度が上昇した (C_{max} : 5.66 倍、 $AUC_{0-\infty}$: 3.00 倍) との報告がある。	機序：グラゾプレビルによる腸管の CYP3A 及び BCRP の阻害が考えられている。
レテルモビル	レテルモビルとの併用により本剤の血漿中薬物濃度が上昇した (C_{max} : 2.17 倍、 $AUC_{0-\infty}$: 3.29 倍) との報告がある。	機序：レテルモビルによる CYP3A、OATP1B1/1B3 及び BCRP の阻害が考えられている。
フチバチニブ	併用により本剤の血中濃度が上昇し、副作用が発現しやすくなるおそれがある。	機序：フチバチニブによる BCRP の阻害が考えられている。
グレープフルーツジュース	グレープフルーツジュース 1.2L/日との併用により、本剤の AUC_{0-72h} が約 2.5 倍に上昇	機序：グレープフルーツジュースによる CYP3A4 の阻害が考えられている。

	したとの報告がある。	
エファビレンツ	本剤の血漿中薬物濃度が低下した (Cmax : -12%、AUC _{0-24h} : -43%) との報告がある。	機序 : エファビレンツによる CYP3A4 の誘導が考えられている。
リファンピシン	リファンピシン投与 17 時間後に本剤を投与したところ本剤の血漿中薬物濃度が低下した (Cmax : -40%、AUC : -80%) との報告がある。	機序 : リファンピシンによる CYP3A4 の誘導が考えられている。
ベキサロテン	ベキサロテンとの併用により本剤の AUC が約 50% 低下したとの報告がある。	機序 : ベキサロテンによる CYP3A4 の誘導が考えられている。
陰イオン交換樹脂	本剤の血漿中薬物濃度が約 25% 低下したが、LDL-コレステロールの低下率はそれぞれを単独で使ったときより大きかった。	機序 : これらの薬剤によるアトルバスタチンの吸収阻害 (吸着) に基づく血漿中薬物濃度の低下が考えられている。
ジゴキシン	定常状態において血漿中ジゴキシン濃度が上昇する (本剤 10mg 投与で Cmax : +9.9%、AUC _{0-24h} : +3.6%、CLr : 129 → 128mL/min、80mg 投与で Cmax : +20.0%、AUC _{0-24h} : +14.8%、CLr : 160 → 149mL/min) ことが報告されている。併用する場合は、血漿中薬物濃度のモニターを十分に行うこと。	機序 : 本剤によるジゴキシンの P-gp を介した排出の抑制が示唆されている。
経口避妊薬 ノルエチンドロン-エチ ニルエストラジオール	ノルエチンドロン (Cmax : +24%、AUC _{0-24h} : +28%) 及びエチニルエストラジオール (Cmax : +30%、AUC _{0-24h} : +19%) の血漿中濃度の上昇が認められた。	機序 : 本剤によるノルエチンドロン及びエチニルエストラジオールの初回通過効果の減少が考えられている。

8. 副作用

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

(1) 重大な副作用と初期症状

11.1 重大な副作用

11.1.1 横紋筋融解症、ミオパチー (いずれも頻度不明)

筋肉痛、脱力感、CK 上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とする横紋筋融解症があらわれ、急性腎障害等の重篤な腎障害があらわれることがある。また、ミオパチーがあらわれることがあるので、広範な筋肉痛、筋肉圧痛や著明な CK の上昇があらわれた場合には投与を中止する

こと。[9.1.2、9.2.1、9.2.2、9.8、10.2 参照]

11.1.2 免疫介在性壊死性ミオパチー（頻度不明）

近位筋脱力、CK 高値、炎症を伴わない筋線維の壊死、抗 HMG-CoA 還元酵素（HMGCR）抗体陽性等を特徴とする免疫介在性壊死性ミオパチーがあらわれ、投与中止後も持続する例が報告されているので、患者の状態を十分に観察すること。なお、免疫抑制剤投与により改善がみられたとの報告例がある。

11.1.3 劇症肝炎、肝炎、肝機能障害、黄疸（いずれも頻度不明）

[8.3 参照]

11.1.4 過敏症（頻度不明）

血管神経性浮腫、アナフィラキシー反応、蕁麻疹を含む過敏症状があらわれたとの報告がある。

11.1.5 無顆粒球症、汎血球減少症、血小板減少症（いずれも頻度不明）

[8.4 参照]

11.1.6 中毒性表皮壊死融解症（Toxic Epidermal Necrolysis：TEN）、皮膚粘膜眼症候群（Stevens-Johnson 症候群）、多形紅斑（いずれも頻度不明）

水疱性発疹があらわれたとの報告がある。

11.1.7 高血糖、糖尿病（いずれも頻度不明）

[8.5 参照]

11.1.8 間質性肺炎（頻度不明）

長期投与であっても、発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部 X 線異常等が認められた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。

11.1.9 重症筋無力症（頻度不明）

重症筋無力症（眼筋型、全身型）が発症又は悪化することがある。[9.1.3 参照]

（２）その他の副作用

11.2 その他の副作用

	5%以上	0.1～5%未満	頻度不明
皮膚		そう痒感、発疹、皮疹、発赤	脱毛症、光線過敏、皮膚乾燥、皮膚亀裂、爪の障害
血液			血小板減少、白血球減少、貧血
肝臓	AST 上昇、ALT 上昇、 γ -GTP 上昇	Al-P 上昇、LDH 上昇、肝障害	
消化器		アミラーゼ上昇、嘔吐、下痢、胃炎、軟便、嘔気、口内炎、胸やけ、便秘、胃不快感、腹痛、心窩部痛（心窩部の疼痛）、腹部膨満感	膵炎、胆汁うっ滞性黄疸、食欲不振、消化不良、悪心、口渇、舌痛、舌炎、舌のしびれ、口のしびれ、口唇炎、咽頭不快感
呼吸器		咳	
筋骨格系	CK 上昇		痙攣、筋炎、筋肉痛、血中ミオグロビン上昇、無力症、関節痛、頸・肩のこり、胸痛、背部痛、こわばり感、腱炎、腱痛
感覚器			異常感覚、末梢神経障

			害、耳鳴、霧視
精神神経系		めまい、不眠（症）	勃起障害、四肢しびれ（感）、眠気、健忘症、抑うつ、悪夢
内分泌	テストステロン低下	コリンエステラーゼ上昇、TSH 上昇、ACTH 上昇、アルドステロン低下	女性化乳房
代謝異常		グルコース上昇、HbA1c 上昇、血清鉄低下	低血糖症
腎臓		K 上昇	BUN 上昇、血中クレアチニン増加、血尿
その他		脳梗塞、肺炎、頭痛、全身倦怠（感）、带状疱疹	浮腫（顔面・四肢等）、動悸、頻脈、味覚異常、頻尿、排尿困難、着色尿、熱感、発熱

9. 臨床検査結果に及ぼす影響

設定されていない

10. 過量投与

設定されていない

11. 適用上の注意

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

PTP 包装の薬剤は PTP シートから取り出して服用するよう指導すること。PTP シートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することがある。

12. その他の注意

(1) 臨床使用に基づく情報

設定されていない

(2) 非臨床試験に基づく情報

設定されていない

IX. 非臨床試験に関する項目

1. 薬理試験

(1) 薬効薬理試験

「VI. 薬効薬理に関する項目」の項参照

(2) 安全性薬理試験

該当資料なし

(3) その他の薬理試験

該当資料なし

2. 毒性試験

(1) 単回投与毒性試験

該当資料なし

(2) 反復投与毒性試験

該当資料なし

(3) 遺伝毒性試験

該当資料なし

(4) がん原性試験

該当資料なし

(5) 生殖発生毒性試験

該当資料なし

(6) 局所刺激性試験

該当資料なし

(7) その他の特殊毒性

該当資料なし

X. 管理的事項に関する項目

1. 規制区分

製 剤：処方箋医薬品（注意－医師等の処方箋により使用すること）
有効成分：該当しない

2. 有効期間

3 年

3. 包装状態での貯法

室温保存

4. 取扱い上の注意

20. 取扱い上の注意

開封後は湿気を避けて保存すること。

5. 患者向け資材

くすりのしおり：あり
患者向医薬品ガイド：あり
その他の患者向け資材
・アトルバスタチン錠「NS」を服用される患者様へ
「XIII. 2. その他の関連資料」の項参照

6. 同一成分・同効薬

同一成分薬：リピトール錠 5mg、リピトール錠 10mg 等
同 効 薬：プラバスタチンナトリウム、シンバスタチン、フルバスタチンナトリウム、ピタバスタチンカルシウム、ロスバスタチンカルシウム等

7. 国際誕生年月日

1996 年 11 月 8 日

8. 製造販売承認年月日及び承認番号、薬価基準収載年月日、販売開始年月日

製品名	製造販売承認年月日	承認番号	薬価基準収載年月日	販売開始年月日
アトルバスタチン錠 5mg「NS」	2013 年 2 月 15 日	22500AMX00216000	2013 年 6 月 21 日	2013 年 6 月 21 日
アトルバスタチン錠 10mg「NS」	2013 年 2 月 15 日	22500AMX00217000	2013 年 6 月 21 日	2013 年 6 月 21 日

9. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容

該当しない

10. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容

該当しない

11. 再審査期間

該当しない

12. 投薬期間制限に関する情報

本剤は、投薬期間に関する制限は定められていない。

13. 各種コード

製品名	厚生労働省薬価基準 収載医薬品コード	個別医薬品コード (YJ コード)	HOT 番号	レセプト電算処理 システム用コード
アトルバスタチン錠 5mg 「NS」	2189015F1015	2189015F1198	122448102	622244801
アトルバスタチン錠 10mg 「NS」	2189015F2194	2189015F2194	122449802	622244901

14. 保険給付上の注意

本剤は診療報酬上の後発医薬品である。

XI. 文献

1. 引用文献

- 1) 作用機序（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ホ.1.8）
- 2) 社内資料：安定性試験（錠 5mg）
- 3) 社内資料：安定性試験（錠 10mg）
- 4) 社内資料：溶出性試験（錠 5mg）
- 5) 社内資料：溶出性試験（錠 10mg）
- 6) 中村治雄ほか：Prog Med.1998；18（7）：1690-1723
- 7) 後期第Ⅱ相試験（用量設定試験）（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ト.1.（3））
- 8) 山村卓ほか：臨床医薬.1998；14（11）：2031-2054
- 9) 家族性高コレステロール血症ヘテロ接合体患者対象試験（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ト.1.（7）.1））
- 10) 家族性高コレステロール血症ホモ接合体患者に対する試験（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ト.1.（7）.2））
- 11) 田妻進ほか：臨床医薬.1998；14（12）：2163-2177
- 12) 血液凝固・線溶系に及ぼす影響の検討試験（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ト.1.（8）.2））
- 13) 田中明ほか：新薬と臨床.1998；47（8）：1230-1248
- 14) 船津敏之ほか：薬理と治療.1998；26（9）：1435-1441
- 15) 田中秀行ほか：薬理と治療.1998；26（9）：1451-1454
- 16) Bocan TM, et al. : Atherosclerosis.1994；111（1）：127-142（PMID：7840808）
- 17) Burnett JR, et al. : Arterioscler Thromb Vasc Biol. 1997；17（11）：2589-2600（PMID:9409231）
- 18) Bisgaier CL, et al. : J Lipid Res.1997；38（12）：2502-2515（PMID：9458274）
- 19) 荒井幸規ほか：薬理と治療.1998；26（9）：1475-1481,1483-1486
- 20) 鈴木雅徳ほか：薬理と治療.1998；26（9）：1469-1474
- 21) 代謝物の薬理作用（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ホ.1.7）
- 22) 船津敏之ほか：薬理と治療.1998；26（9）：1443-1450
- 23) Funatsu T, et al. : Atherosclerosis. 2001；157（1）：107-115（PMID：11427209）
- 24) 角田裕俊ほか：薬理と治療.1998；26（9）：1461-1468
- 25) 大石紫満子ほか：薬理と治療.1998；26（8）：1253-1266
- 26) 海外および国内で実施された臨床薬理試験（体内動態）の比較（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ヘ.3.（5）.1））
- 27) 大石紫満子ほか：薬理と治療. 1998；26（8）：1279-1293
- 28) 社内資料：生物学的同等性試験（錠 5mg）
- 29) 社内資料：生物学的同等性試験（錠 10mg）
- 30) 大石紫満子ほか：薬理と治療.1998；26（8）：1267-1277
- 31) 根本裕之ほか：薬理と治療.1998；26（8）：1229-1240
- 32) 代謝酵素（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ヘ.3.（7）.4））
- 33) 排泄（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ヘ.3.（8））
- 34) 代謝（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ヘ.3.（7））
- 35) 第十八改正日本薬局方解説書.東京：廣川書店；2021.C195-201
- 36) Stern RH, et al. : J Clin Pharmacol.1997；37（9）：816-819（PMID：9549635）
- 37) 肝機能障害例における検討（リピトール錠：2000年3月10日承認、申請資料概要ヘ.3.（6）.5））
- 38) 大石紫満子ほか：薬理と治療.1998；26（8）：1295-1305

2. その他の参考文献

特になし

XII. 参考資料

1. 主な外国での発売状況

該当しない

2. 海外における臨床支援情報

該当しない

XIII. 備考

1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての参考情報

(1) 粉碎

個別に照会すること

[問合せ]

科研製薬株式会社 医薬品情報サービス室

フリーダイヤル：0120-519-874

(2) 崩壊・懸濁性及び経管投与チューブの通過性

個別に照会すること

[問合せ]

科研製薬株式会社 医薬品情報サービス室

フリーダイヤル：0120-519-874

2. その他の関連資料

(1) 提供用資料

アトルバスタチン錠「NS」を服用される患者様へ

(科研製薬株式会社 医療関係者向けウェブサイト KAKEN Medical Pro 参照：

<https://medical-pro.kaken.co.jp/product/atorvastatin/index.html#doc>)

(2) GS1 コード

製品名	包装	GS1 コード	
		調剤包装単位	販売包装単位
アトルバスタチン錠 5mg 「NS」	100 錠 PTP	(01)04987447 224915	(01)14987042 388019
アトルバスタチン錠 10mg 「NS」	100 錠 PTP	(01)04987447 225912	(01)14987042 388217

